

晨には生活向上への精進を促がし夕べには其の日の疲勞を慰すべく詩の仙境に遊ばし夜は悲母の子守歌をなすもの、それは延嶽に永劫に鳴り響いて止まぬ梵鐘の音である。永劫の音、それは久遠の生命である。吾々負笈の徒、この梵鐘の音を搖籃として朝には獅子王の勇猛心を起して行學二道の達成に力め夕には靜寂不動の安心を觀じ以て久遠の生命を自覺し正法弘通末法濁惡の闇を開拓せねばならぬ。

弧を畫いて鳴り渡る鐘の音の韻、その韻の一つ一つを吾々の手によりて建築傳播しやうではないか。(33)

事變に際して日持上人を思ふ

阿 部 東 洋

永仁三年一月、日持上人四海歸妙の聖教廣布の爲に單身蝦夷を發て滿洲蒙古の地に留錫し給ひてより茲に六百五十有餘年、此の支那事變に對して吾徒は日持上人に何を學ぶべきでせうか。それは宗祖上人の

「日は東より出でて西を照す、佛法も亦かくの如し。佛法必ず東土より出づべきなり」

をこの事變を契機として實現し、法華經精神による親日東洋平和の基礎を建設す重任ある吾等は、切に持師の信念と意氣と其の勇猛心とを學ぶべきであります。

佛教では因縁の稀濃が重大なる役割を示めして居るが、古來日支間は地勢上、民族上、文化上、殊に佛教に於て因縁淺からざる宿縁の間柄であります。茲に於て正義に惑ふ曖昧なる支那を救済することこそ吾等法華經の行者のとるべき急務では無いでせうか。日支の確乎なる握手提携こそ眞にアジャヤ平和の確保される時であると信ずる者であります。

今や聖戰一年有餘、抗日の主都陥ち武器糧食の咽喉たる南支止めを刺され第二の都武漢正に浮藻草の如き存在となつて居ります。然るに蔣政權未だ惡夢破れず英ソに媚び抗日を叫び長期抗戰を夢見て居ります。之れ日本國民の熱し易く冷め易い短所を突いた予であります。之れに對して我國の日本精神發揚、即ち精神總動員は盾でありますが要するに思想戰の對峙であります。

思ふにこの聖戰は日本精神の發露であり「毒氣深入」の支那をして毒手より救はんとする良醫の破邪顯正のメスであり、法華經精神の顯れであります。日本は正法の國、正氣の國、正信の國であり、之を彼等の胸臆植え付けるのは吾等に與へられた天與の任務であります。

今後に来るべき文化工作に於て、思想對策に於て眞に日本主義を高揚し支那否東洋平和を遂げる者、吾等日蓮宗徒は日持上人大陸順化の大勇猛心を奮起して思想善導以つて四海歸妙の實現に努力邁進しようではありませんか。(34)